



Arakawa City
Art Culture Promotion Foundation

公益財団法人
荒川区芸術文化振興財団

▶ リンク集

文字サイズ

小 中 大

[トップ](#) > [荒川の人](#) > No.36

No.36 玉川 豊(たまがわ ゆたか)

蓄音機で練習した浪曲

結成22年、出身学園へ慰問も

舞台いっぱいにぎやかに、和服姿の四人がギター、三味線をかかえ笑いをふりまく「玉川カルテット」。リーダーの玉川豊さんは、本名が茶間豊。聞くとだれもが、にこっとします。町屋に住んで十年になります。

一住み心地はいかがですか。

いいですね。気取らないところが。同じ下町でも、湯島に比べれば町屋の方がくらし向きも芸人向きです。

一お忙しいそうですね。

このところ、おかげさまで仕事が忙しくなりました。自分でもわからないのですがポーズものが少なくなったからでしょうか。でもあんまり毎日舞台だと、神経がおかしくなります。

一といますと？

ステージに立つと全神経をつかうのです。使ってはいけない言葉なんかありまして。テレビでさえ最近はかなり過激なことをやっていますが、舞台ではもっとすれすれのところまで行く。とくにきわどい話の時なんか最高に気をつかいます。その場の雰囲気じゃべるものですから。

一結成何年になりますか。

今の四人のメンバーになってから二十二年になります。みんな浪曲上りです。浪曲が下火になったとき、浪曲にお笑いを入れるといいんじゃないか、やってみよう、ということでスタートしました。

一長く続きましたね。けんかしませんか。

昔はよくめめました。テレビ出演で、おれはせりふがないとか。今はそんなこともなくなりました。「金もいらなきや、女もいらぬ。私はもう少し背がほしい」のせりふを柱にしてギャグを折々飛ばす、これが一番うけてます。ワンパターンと言う人もいますが、それやってほしいとお客さんに言われるのです。

一浪曲に入ったのは？

中学一年だったかな、川崎の新日本学園という施設にいたころ、慰問に来た玉川勝太郎の浪曲を聞いて、浪曲っていいなあと思ったのです。中学を卒業して電気屋に勤めましたが、どうしても浪曲をやりたいと、ある人を介して声のテストを受け、勝太郎に入門しました。十八歳でした。当時は、ラジオでも、浪曲学校だの天狗道場だの、浪曲をよくやっていました。蓄音機を買ってきて一生懸命覚えましてよ。宮尾たかしについて司会の勉強もしたのですが、それが今大役になっています。

一お生まれは？

昭和十四年、横浜で生まれました。六つのとき空襲で焼け出され、七つのとき父が亡くなり、恵まれない子どものための施設に預けられたわけです。

一たとえば。

今でも、五月五日には新日本学園の子供たちの慰問を続けてます。もう十四年になりますか。でも小さい子どもでしょう、浪曲はだめなんです。やっぱり手品とか百面相だとか、見るものでないと。そこで、われわれがスナックなどに出演した時にお客さんがくれたご祝儀をためておいて、それをギャラに当てて、演芸の人に慰問に行ってもらってます。

一子どものこととなると、いろいろ思いがあるんですね。

そう、自分もお世話になったから。恩返しまでは行きませんが……。年に一度はいいことやろかな、と。

日本の大衆芸能の原点でもある浪曲を、「玉カル」は、お笑いの形で守り続けています。呼吸もびつたりのメンバー四人は体の続く限り頑張ります、どうれしい言葉をリーダーは残してくれました。

読売新聞編集委員・平田明隆

カメラ・水谷昭士

